

山口県の近代陶磁器製造業（二） 明治後期の港湾資料にみる陶磁器の移出入

河田 聡

1. はじめに

明治期の鉄道網の整備以前に地域内輸送体系を確立させ、各地の物産及び生活物資の流通を担ったのは、汽船による日本各地の主要港湾を結ぶ定期航路の整備といえる。汽船による輸送体系は、近世の和船による輸送と異なり、天候に左右されず遠隔地間を定期的に往来するという「時間」と「物量」そして「距離」の観点から、近世の輸送体系と大きく異なる特徴である。

このような近代の港湾を中心とした輸送体系は、新たな汽船停泊地や近世より継承される各地の主要港を拠点として、そこから帆船等を利用した近隣小港を結ぶ地廻り輸送網と、大阪・神戸等の大規模港湾や特産品を生産する地域に隣接した港湾から近隣の主要港を介さずに直接的に往来する広域輸送網という二重構造による物資の移出入が近代の港湾を中心とした輸送体系といえる。

本稿では、山口県内の陶磁器生産地の港湾を利用した移出入動向と陶磁器生産地をかかえる主要港に対する他地域からの陶磁器製品の移入動向をあきらかにするとともに、山口県内の主要港湾の輸送網の特徴をとらえることで、山口県内における陶磁器を利用した生活文化研究の基礎資料とすることを目的とする。

2. 山口県内の近代輸送網

近代における西日本の汽船による輸送網の整備は、明治 17（1884）年に大阪商船会社の開業時に

表 1 大阪商船株式会社開業時路線一覧

航路	寄港地	山口県
第一本線	大阪、神戸、馬関、博多、長崎、百貫石	○
第二本線	大阪、神戸、馬関、博多、長崎、百貫石、大川	○
第三本線	大阪、神戸、多度津、宇島、馬関、博多、長崎	○
第四本線	大阪、神戸、細島、油津、鹿児島	
第五本線	大阪、神戸、多度津、今治、三津浜、室津(上関)、三田尻、馬関、博多、唐津、伊万里	○
第六本線	大阪、神戸、多度津、今治、三津浜、室津(上関)、三田尻、馬関、博多	○
第七本線	大阪、神戸、高松、多度津、今治、三津浜、室津(上関)、三田尻、馬関	○
第八本線	大阪、神戸、多度津、今治、三津浜、長浜、別府、大分、佐賀関、臼杵、佐伯、延岡、細島	
第九本線	大阪、神戸、多度津、今治、三津浜、長浜、別府、大分、佐賀関、八幡浜、宇和島	
第十本線	大阪、神戸、高松、丸亀、多度津、鞆津、尾道、竹原、音戸、広島	
第十一本線	大阪、神戸、岡山、小豆島、高松、丸亀、多度津、鞆津、尾道	
第十二本線	大阪、神戸、多度津、馬関、瀬戸崎(仙崎)、萩、浜田、境	○
第十三本線	大阪、神戸、徳島	
第十四本線	大阪、兵庫、明石、高松、飾磨、網干、岩見、室津(播州)、坂越	
第十五本線	大阪、兵庫、假屋、志筑、洲本	
第十六本線	大阪、兵庫、撫養	
第十七本線	大阪、和歌山	
第十八本線	大阪、神戸、高知、須崎	
第一支線	長崎、百貫石、大川	
第二支線	馬関、三田尻、室津、大畑、外入(周防大島)、新湊、宮島、広島	○
第三支線	広島、宮島、新湊、大畑、阿賀、三津浜、今治、尾道	
第四支線	飾磨、網干、岩見、室津(播州)、坂越、牛窓、岡山、丸亀、多度津	

(『大阪商船株式会社五十年史』昭和9年 大阪商船発行)より作成

設定された 18 航路によって開始された(表 1)。

これら大阪商船開業時のいずれの航路も大阪を起点として西日本を中心とする航路であり、このうち山口県内に寄港する航路は、第一・第二・第三・第五・第六・第七・第十二本線および第二支線の八航路である。

山口県内でもっとも寄港が多い港湾が馬関(下関)港であり、次いで、三田尻港となる。また、山口県内に寄港する八航路すべてで馬関(下関)

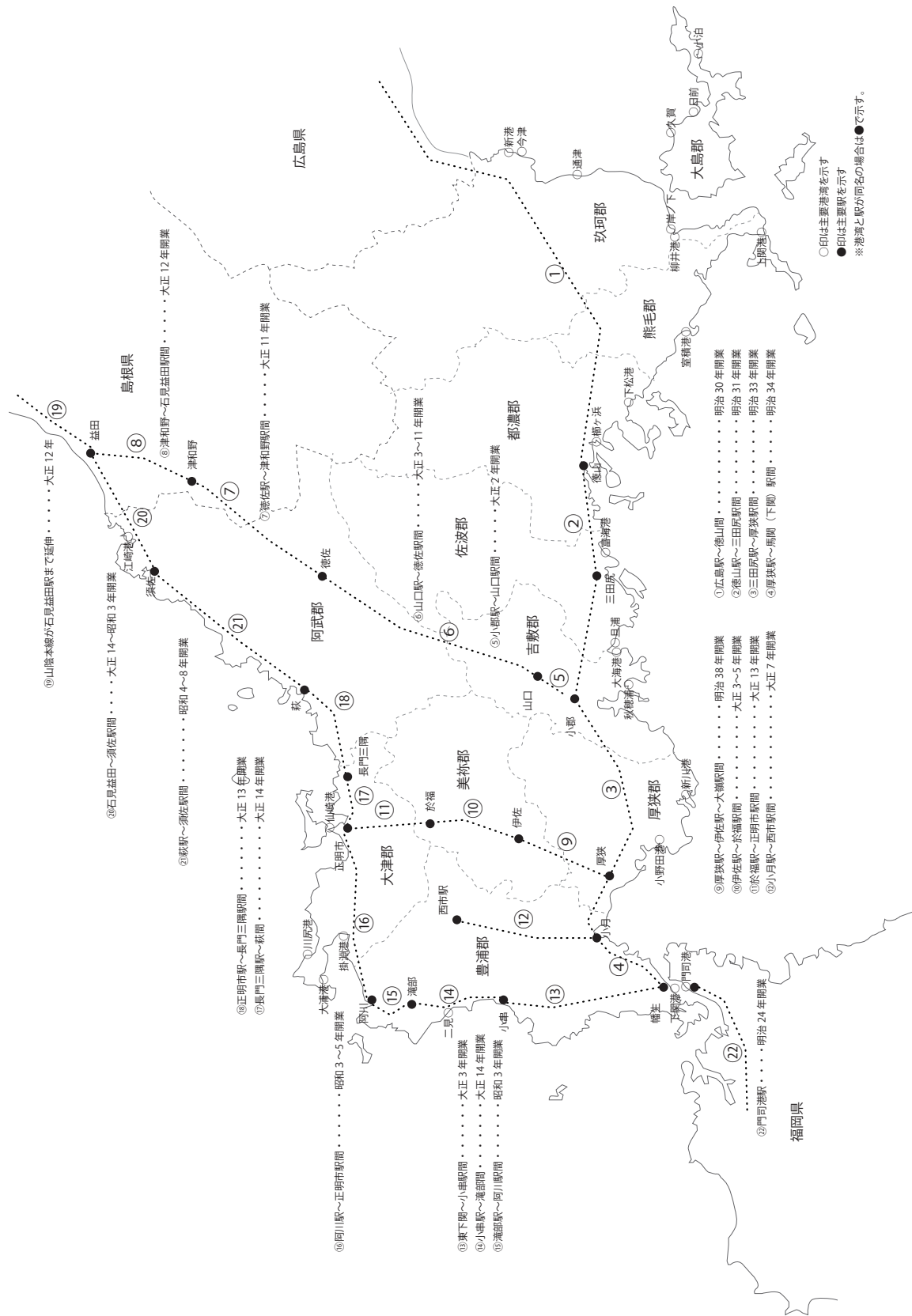


図 1 山口県内主要港位置及び鉄道概略図

港へ寄港することは、近世段階からの下関港の国内流通における重要性を表すものであろう。また、当然のことながら陶磁器輸送においても下関港は県内の拠点であり、明治44（1911）年発行の『各府県重要商品調査報告』（農商務省商務局）においても陶磁器の輸送について「～硫酸瓶ヲ除キテハ多ク下関ニ集マリ下関ヨリ各消費地ニ分配セラル 下関ニ至ルモノハ瀬海地方ハ帆船ヲ利用スルモノ多ク其他ノ地方ハ鉄道便ニ依ルモノノ如シ」と記されている。このように山口県内の陶磁器の流通を知るうえで下関港を中心とした流通網の把握は重要であるといえる。

山口県を含む全国の港湾における輸送状況を知ることが可能な資料として、内務省土木局による、いわゆる「港湾統計」がある。当資料は、明治39（1906）～明治40（1907）年に『日本帝国港湾統計』として刊行され、以後は『大日本帝国港湾統計』として戦前期まで継続的に各港湾の出入船や貨物などが網羅的に記載される一級の資料といえる。

その一方で、移出入先港湾による調査項目の不一致、あるいは港湾を有する地域における重要品としての認識の相違や掲載港湾の著しい変化など継続的な情報を得ることができないという欠点がある。そこで、港湾掲載件数のもっとも多い時期の資料のひとつであるとともに山口県内では山陽方面で鉄道網がすでに整備されながらも、山陰方面においては鉄道網が敷設されておらず（図1）港湾輸送が中心となる時期にあたる明治後期に調査された『大日本帝国港湾統計』を利用することで、山口県内の陶磁器の移出入の状況を把握することとする。

まず、本稿においては、『日本帝国港湾統計』（明治39年）、『大日本帝国港湾統計』（明治41・42・43年）の港湾統計を利用することとした。このうち、主に利用する資料が明治41（1908）年調査の『大日本帝国港湾統計』である。明治41（1908）年に調査された『大日本帝国港湾統計』は、山口県内の67港湾の移出入品目について記載されている。しかし、明治42（1909）年の調査より港湾記載件数が激減することから、県内の港湾の輸送状況を知るうえではもっとも充実した資料といえる。この調査において、山口県内諸港から陶磁器の移出入が記載される件数は合計13港湾となる（表2）。このうち、鉄道未開通の響灘沿岸及び日本海沿岸地域の港湾は、13港湾中8港となり、下関港を除く4港が周防灘沿岸となる。当然のことながら周防灘沿岸部の記載件数の少なさは、明治41（1908）年調査時には山陽本線が全線開通していることから、下関を含む山陽側の主要港はこの時期にはすでに鉄道網を利用した輸送網を確立していた可能性が高いためであろう。

3. 山口県日本海沿岸諸港の陶磁器移出入状況

次に、明治41（1908）年の『大日本帝国港湾統計』による陶磁器の移出入の記載された日本海沿岸の諸港と明治41（1908）年前後に調査が実施された『山口県勸業年報』による各郡内の窯業地の状況を概観する。（表3）。

山口県内の日本海沿岸の郡区は、阿武郡・大津郡・豊浦郡となる。ただし、豊浦郡については、山口県西端にあたり日本海（響灘）～周防灘を含む郡域となっている。

このうち、阿武郡の主要な窯業地は、須佐焼・萩焼（松本焼）・小畑焼などである。当郡を『山口県第二十五回勸業年報』（明治41年調査）で確認すると、製造戸数13戸、職工64人をかかえる地域である。製造品の特色としては、家具類に偏り、飲食器の製造割合は極めて低い。そのことから

表2 山口県内主要港陶磁器取引一覧

陶磁器取引一覧(明治39年)

港湾名	品種	種別	数量	価格	移出入先
下関	磁器	輸入	20,630	個	57,764
		輸出	16,700	個	3,696
	陶器	輸入	4,550	個	4,550
		輸出	3,360	個	50,100
江崎(阿武郡)	陶磁器	輸入	300	個	1,500
大井(阿武郡)	陶器	輸出	3,415	個	520
小島(大津郡)	陶磁器	輸入	300	個	300
仙崎(大津郡)	陶磁器	輸入	1,800	個	1,800
		輸出	400	個	400
川尻(大津郡)	陶磁器	輸入	80	個	800
掛淵(大津郡)	陶磁器	輸入	1,750	個	1,750
通浦(大津郡)	陶磁器	輸入	180	個	180
阿川(豊浦郡)	陶磁器	輸入	530	個	423
		輸出	310	個	2,800
小野田(厚狭郡)	陶磁器	輸入			28,870
居能(厚狭郡)	陶磁器	輸入			1,300
且浦(吉敷郡)	陶器	輸出	12,800	個	620
久賀(大島郡)	陶器	輸入	790	個	2,370

(『日本帝国港湾統計』内務省土木局)より作成

陶磁器取引一覧(明治41年)

港湾名	品種	種別	数量	価格	移出入先
下関	磁器	移入	25,852	個	61,537
		移出	12,039	個	10,127
	陶器	移入	15,020	個	11,503
		移出	12,039	個	10,129
江崎(阿武郡)	陶磁器	移入			2,400
大井(阿武郡)	陶器	移出			598
小島(大津郡)	陶磁器	移入			240
仙崎(大津郡)	陶磁器	移入			2,200
川尻(大津郡)	陶磁器	移入	95	貫	85
大浦(大津郡)	陶磁器	移入			198
掛淵(大津郡)	陶磁器	移入			1,885
阿川(豊浦郡)	陶磁器	移出			2,000
且浦(吉敷郡)	陶器	移出			2,600
柳井(玖珂郡)	陶磁器	移入			2,000
岸ノ下(玖珂郡)	陶磁器	移入			1,740
		移出			240
久賀(大島郡)	陶器	移入			2,370
		移出			1,740

陶磁器取引一覧(明治42年)

港湾名	品種	種別	数量	価格	移出入先
下関	陶器	移入	7,510	個	5,633
		移出	6,020	個	4,515
	磁器	移入	15,512	個	11,503
		移出	14,200	個	29,370
江崎(阿武郡)	陶磁器	移入	2,600	個	1,500
大浦(大津郡)	陶磁器	移入	22	貫	198
		移出	400	俵	3,350
柳井岸下(玖珂郡)	陶磁器	移入	200	俵	600
		移出	790	梱	2,370
久賀(大島郡)	陶器	移入	580	梱	1,740
		移出			

陶磁器取引一覧(明治43年)

港湾名	品種	種別	数量	価格	移出入先
下関	陶磁器	移入	43,000	個	145,000
		移出	41,500	個	125,000
江崎(阿武郡)	陶磁器	移入	286	個	1,650
柳井岸下(玖珂郡)	陶磁器	移入	840	俵	3,010
		移出	300	俵	900
		移出	40	俵	120
		移出	700	個	2,500
久賀(大島郡)	陶器	移入	700	個	2,500
		移出	500	梱	1,800

(『大日本帝国港湾統計』内務省土木局港湾課)より作成

いわゆる茶陶における萩焼の売り上げは低く、それ以外の雑器を製造する小畑焼などが製造の中心であったと考えられる。

阿武郡の窯業は、この明治41(1908)年は飲食器製造額が統計上もっとも低い時期にあたり、さらには製造戸数も下降を続け、明治44(1911)年には6戸にまで減少する。しかし、以降は再び製造戸数や飲食器等の製造品価格も上昇に転じる、いわば阿武郡の陶磁器製造業においては変換期にあたる時期と考えても良い。

つづいて、『大日本帝国港湾統計』の記録をみることにする(表2)。日本海沿岸部の窯業地である阿武郡の萩焼、小畑焼などの近隣港湾からの陶磁器移出の記載は見られない。ただし、明治39・41年記録によると萩・小畑焼より北方に位置する大井港から萩港へ陶磁器の移出が見られる。

小畑焼の明治後期から大正初期の移出状況は港湾資料には確認できないが、北村弥一郎による大正3(1914)年3月巡回時の記録によれば、小畑焼の販路として「徳利は桜正宗・菊正宗用及び県下柳井町の醤油用、大阪の醤油用とす 食

器は萩取引とし又石見に直接販売す夫にて販売し盡くし其以上に販売を求むるの要なし」と記している。また、徳利製造については「明治四五年頃炭酸水用として京都に出ししを始とす 酒瓶としては盛ビール(京都)の為に始めて作れり」としている。

阿武郡において陶磁器の移入が認められるのは田万川地区の江崎港である。江崎港は須佐焼の窯場のある須佐地区の北側に位置する港で、立地的には萩よりも島根県益田に近い場所となる。江崎港では、明治39・41～43年と継続的に陶磁器の移入が行われている。移出元については、『日本帝国港湾統計』明治39(1906)年記録によると下関・大阪・萩から陶磁器の移入記録がされているが、つづく41年には九州・下関、明治42・43年記録によると下関を介さずに大阪から直接陶磁器が移入されるようになる。

表3 山口県内郡別陶磁器製造状況(明治40～42・44年)

山口県内郡別陶磁器製造状況(明治40年)

郡区名	製造戸数(戸)	窯数				職工(人)			製造品価格(円)					
		登窯		錦窯	その他	男	女	合計	装飾品	家具	飲食器	玩具	その他	計
		筋	間数											
大島郡								0						
玖珂郡								0						
熊毛郡	5	1	6		4	10	5	15		1,130	220		80	1,430
都濃郡	6	5	20	2		11	6	17		320	2,565		585	3,470
佐波郡	112	30	103		42	148	95	243		50,380	500		16,800	67,680
吉敷郡	26	7	33		6	31	11	42	420	2,150	969		1,213	4,752
厚狭郡	13	15	164			68	41	109		1,190	630		78,330	80,150
豊浦郡	9	9	54	2	2	22	10	32	280	3,500	8,800		1,100	13,680
美禰郡								0						0
大津郡	8	3	9		9	11		11	132	883	2,157	21	131	3,324
阿武郡	14	3	41			52	15	67	2,150	118	14,538	494	680	17,980
下関市								0						0
計	193	73	430	4	63	353	183	536	2,982	59,671	30,379	515	98,919	192,466

(『山口県第24回勸業年報』山口県内務部)より作成

山口県内郡別陶磁器製造状況(明治41年)

郡区名	製造戸数(戸)	窯数				職工(人)			製造品価格(円)					
		登窯		錦窯	その他	男	女	合計	装飾品	家具	飲食器	玩具	その他	計
		筋	間数											
大島郡								0						
玖珂郡								0						
熊毛郡	5	1	6		4	10	5	15		1,400	230		80	1,710
都濃郡	5	3	16		2	8	3	11		285	2,345		185	2,815
佐波郡	115	22	113		42	158	96	254		49,400	500		23,550	73,450
吉敷郡	25	6	31		5	28	13	41	390	2,150	1,180		1,140	4,860
厚狭郡	11	15	159	1		53	25	78		696	435		33,900	35,031
豊浦郡	11	11	55	2	2	26	11	37	500	3,720	10,570		1,550	16,340
美禰郡								0						0
大津郡	6	5	19			7		7	132	859	2,053	38	119	3,201
阿武郡	13	2	32		6	46	18	64	1,840	10,640	560			13,040
下関市								0						0
計	191	65	431	3	61	336	171	507	2,862	69,150	17,873	38	60,524	150,447

(『山口県第25回勸業年報』山口県内務部)より作成

山口県内郡別陶磁器製造状況(明治42年)

郡区名	製造戸数(戸)	窯数				職工(人)			製造品価格(円)					
		登窯		錦窯	その他	男	女	合計	装飾品	家具	飲食器	玩具	その他	計
		筋	間数											
大島郡								0						
玖珂郡								0						
熊毛郡	6	1	6		4	10	5	15	200	1,400	250		60	1,910
都濃郡	5	3	16		2	8	5	13		305	2,150		185	2,640
佐波郡	126	31	163		41	220	99	319	50	50,050	750		55,850	106,700
吉敷郡	28	8	37			31	13	44	290	2,012	1,061		1,720	5,083
厚狭郡	13	19	170	1	1	62	31	93		2,902	286		58,808	61,996
豊浦郡	11	11	22	4	2	28	15	43	1,500	7,010	13,950		420	22,880
美禰郡								0						0
大津郡	6	5	19			7		7	152	841	1,445	37	125	2,600
阿武郡	14	3	41		7	51	20	71	1,950	100	11,375			13,425
下関市								0						0
計	209	81	474	5	57	417	188	605	4,142	64,620	31,267	37	117,168	217,234

(『山口県第26回勸業年報』山口県内務部)より作成

山口県内郡別陶磁器製造状況(明治44年)

郡区名	製造戸数(戸)	窯数				職工(人)			製造品価格(円)					
		登窯		錦窯	その他	男	女	合計	装飾品	家具	飲食器	玩具	その他	計
		筋	間数											
大島郡								0						
玖珂郡								0						
熊毛郡	6	1	6		5	9	6	15		1,750			2,460	4,210
都濃郡	5	4	20		1	8	4	12		210	2,346		680	3,236
佐波郡	161	31	172	1	45	259	104	363	160	32,085	2,255		76,042	110,542
吉敷郡	24	6	31		18	31	29	60	385	2,490	980		2,882	6,737
厚狭郡	14	19	166	2	2	75	39	114	150	3,660	2,050		47,746	53,606
豊浦郡	10	9	56	4	3	19	11	30	1,738	7,472	12,226	38	849	22,323
美禰郡								0						0
大津郡	7	8	41			8		8	250	275	1,850	35	1,090	3,500
阿武郡	6	9	41			52	20	72	1,050	4,750	7,630	750	2,020	16,200
下関市	1	1	5	2		7	3	10	900	1,000	2,100			4,000
計	234	88	538	9	74	468	216	684	4,633	53,692	31,437	823	133,769	224,354

(『山口県第28回勸業年報』山口県内務部)より作成

また、明治41(1908)年の『大日本帝国港湾統計』で記載される阿武郡の全港湾の移出入品目に対する取引先の件数(図2-1、2-2)を概観すると、阿武郡の港湾では移出入品の取引先として萩港がもっとも多いことから阿武郡の地廻り輸送の主要港は萩港であることがわかる。次いで、下関港からの直接の移出入が多いが、移出取引先としては、下関・門司・若松といった関門地域以上に神戸・

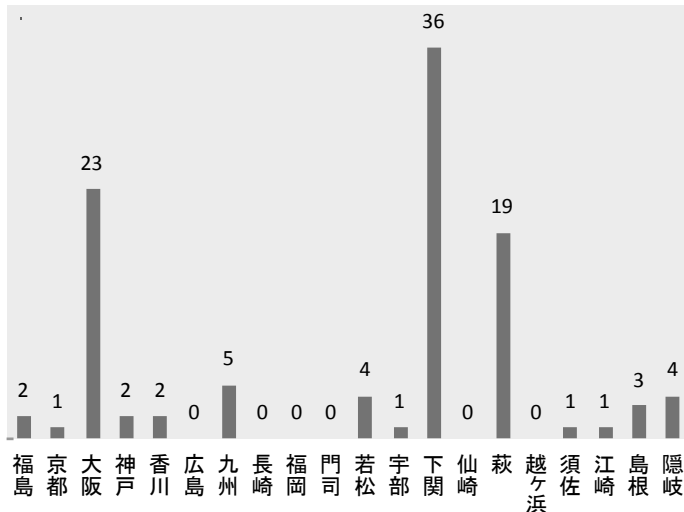


図 2 - 1 阿武郡移入品取引先一覧 (明治 41 年)

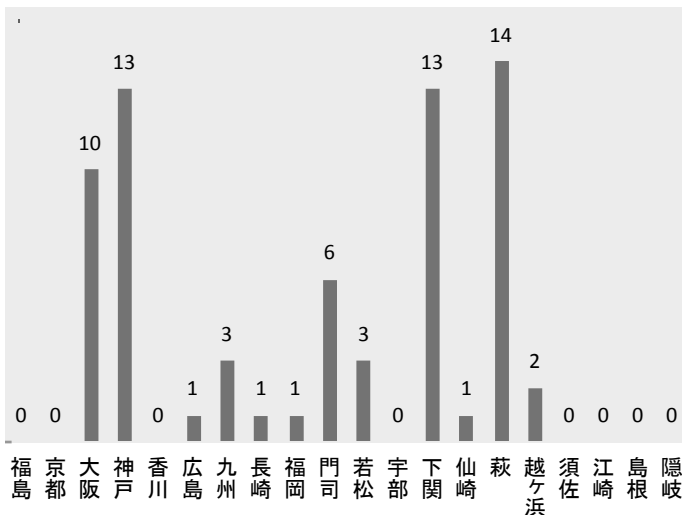


図 2 - 2 阿武郡移出品取引先一覧 (明治 41 年)

大阪を合わせた関西方面への取引が多いことが示されている。

次に、大津郡における窯業生産と港湾資料から概観する。まず、大津郡の陶磁器生産は萩焼と同様に伝統的な茶陶器を生産する深川焼である。『山口県第二十五回勸業年報』(明治 41 年調査)(表 3)で確認すると、製造戸数 6 戸、職工 7 人を有し、県内各郡を比較すればもっとも職工数が少ない地域といえる。製品は、飲食器を中心に生産を行い製造戸数は少ないながらも、装飾品、家具類、飲食器、玩具等の多様な品種を生産するという特徴がある。

また、明治 41 (1908) 年は阿武郡と同様に統計記録上は製造戸数をもっとも減少した時期にあたり、その後、大正～昭和期には製造戸数をふたたび上昇することとなる。

明治 39 (1906) 年の『大日本帝国港湾統計』によれば、深川焼近隣にあ

たる仙崎港から下関港への陶磁器の移出記録がみられる。その一方で、陶磁器の移入記録は大津郡の港湾中 5 港で確認できる(表 2)。これら 5 港の陶磁器移入はすべて下関港からであり、大津郡の陶磁器製造額以上の価格の陶磁器が下関港から大津郡の各港へ移出されていたことを示している。

続いて、豊浦郡についてであるが、豊浦郡は、山口県最大の貿易港である下関港を囲い込むように郡域を形成し、日本海側の響灘沿岸地域と周防灘沿岸地域という両面をもつ。そのため、響灘沿岸の地域において明治 41 (1908) 年の港湾調査時には鉄道網は整備されていないが、周防灘沿岸の地域は下関駅と接する山陽鉄道がすでに開通している(図 1)。

まず、豊浦郡の響灘沿岸地域の主要な窯業地として豊浦郡北部に位置する田耕村、滝部村を中心とした地域である。この地域では近世より窯業が盛んとなり、近世から昭和初期にかけては最大で十四もの窯があったと伝えられる窯業地帯である。

一方、周防灘沿岸に面した地域における主要な窯業地は小月地区を中心とした地域で小月焼・星里焼などがある。

『山口県第二十五回勸業年報』(明治 41 年調査)で豊浦郡の陶磁器生産状況を概観すると、製造戸数 11 戸、職工 37 名を有する地域である(表 3)。また、製造品としては山口県内でもっとも飲食器

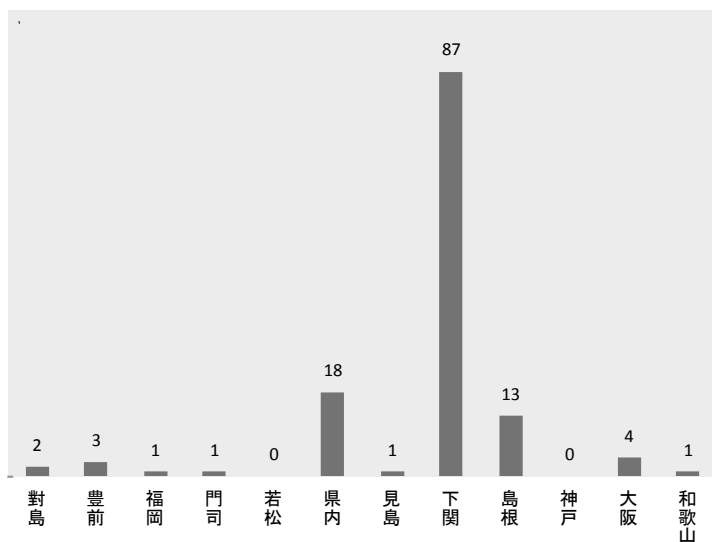


図3-1 大津・豊浦郡移入品取引先一覧（明治41年）

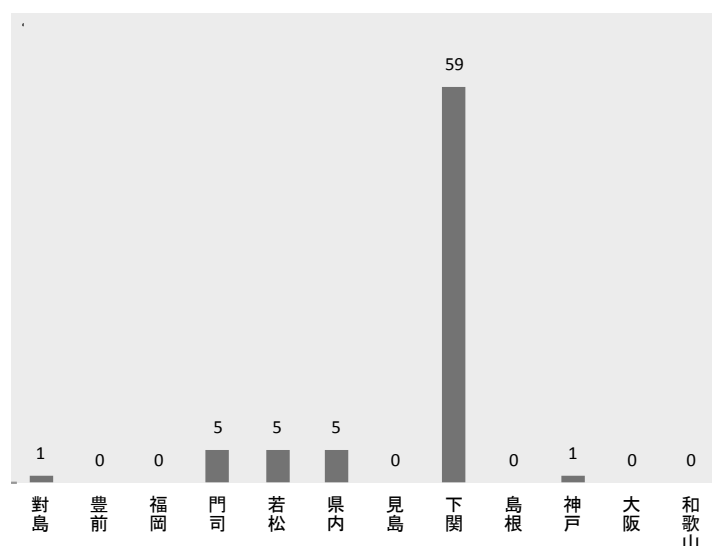


図3-2 大津・豊浦郡移出品取引先一覧（明治41年）

生産割合が高い地域となる。なお、当地域の製品の特徴としては、豊浦郡北部の田耕焼などでは磁器を中心とした食器類の生産のほか、錦窯を導入した多彩な色絵付けの磁器を生産するなど伝統的な技術による陶磁器生産を行っていたが、明治中期頃より徐々に生産規模を縮小する。

一方の豊浦郡南部にあたる周防灘沿岸地域の窯業地では日常雑器を生産するだけでなく、結晶釉や辰砂釉、硬質陶器などの新しい技術を取り入れることで販売単価の高い美術工芸品を数多く生産するほか、明治39（1906）年には西洋式石炭窯を導入するなど近代的な窯業技術や設備投資を実施した窯業地であるという特徴がある。特に星里焼は、明治41（1908）年には山口県の補助を得て陶磁器原料試験場を設置するなど明治後半から大正期にかけて事業規模を拡大したとされる。

これらの豊浦郡北部の窯業地に近接する港からの陶磁器移出記録とし

ては、響灘の北端にあたる阿川港より明治39年、41年と陶磁器が下関港に対して移出され、さらには明治39年には下関港から陶磁器の移入もおこなわれる（表3）。

豊浦郡北部の窯業は山間部である滝部村、田耕村、西市村などに属するだけでなく、そのほかに小規模な窯元が各地に点在していたことから、阿川港から移出された陶磁器製品はこれらいずれかの窯場から運ばれたものと推測される。

つづいて、明治41（1908）年の『大日本帝国港湾統計』で記載される大津郡及び豊浦郡の全港湾の移出入品目に対する取引先の件数から豊浦郡の輸送網について概観する（図3-1・3-2）。一見してわかるように、この両郡部は移出入ともに下関港との取引件数が非常に高い状況を示しており、下関港を中心とした地廻り輸送圏が形成されていたことが確認できる。

4. 周防灘沿岸諸港の陶磁器移出入状況

瀬戸内海沿岸部の周防灘に面した厚狭郡は、豊浦郡に隣接する王喜村に所在する宇津井焼（明治

41年頃に「長州焼」と改称)と厚狭郡須恵村および高千帆村に窯場が存在する。

『山口県第二十五回勸業年報』(明治41年調査)において厚狭郡の陶磁器生産状況を確認すると、製造戸数11戸、職工78人を有する。製造品は、「その他」に分類される製品の比重が高く、これは明治24(1891)年に同地に設立された日本舎密製造株式会社(後の日産化学)小野田工場向けの耐酸瓶と考えられる(表3)。

厚狭郡の陶磁器移出入状況を概観すると、明治39(1906)年に小野田港へ下関及び大阪港から大量の陶磁器移入が見られる(表2)。また、宇部地区の居能港へも下関港からの移入が確認できる。これは小野田地区・宇部地区が両地域ともに工業地帯であることから、この地域の人口増加にともなう生活雑器類の需要の増加によるものと考えられる。

なお、小野田地区における耐酸瓶の運搬については、北村弥一郎によって山口県内の諸窯調査が実施された大正2(1913)年の記録では、耐酸瓶の多くは有帆川から搬出され、東京行きと大阪行きがあったと記録されている。また、『山口県勸業年報』の記録からも耐酸瓶等の製造は大量に行われていたことは間違いない。しかし、『大日本帝国港湾統計』の調査状況では、小野田港からの陶磁器移出記録はなく、何らかの齟齬の可能性も考えられる。

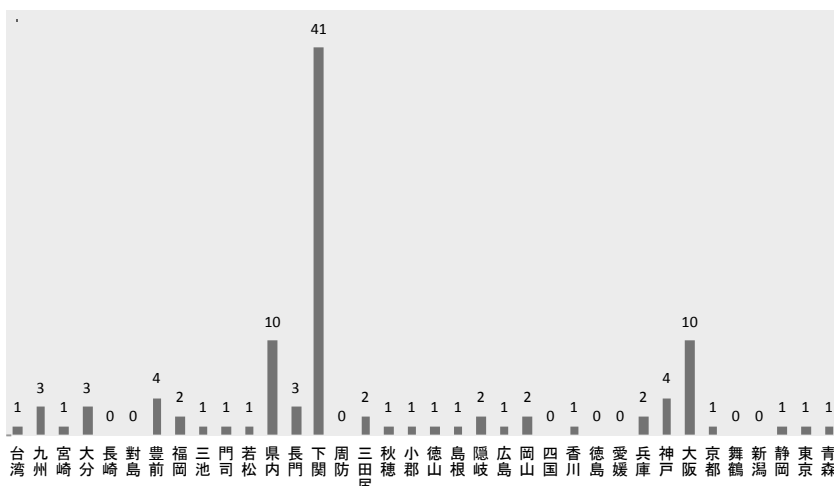


図4-1 厚狭郡移入品取引先一覧(明治41年)

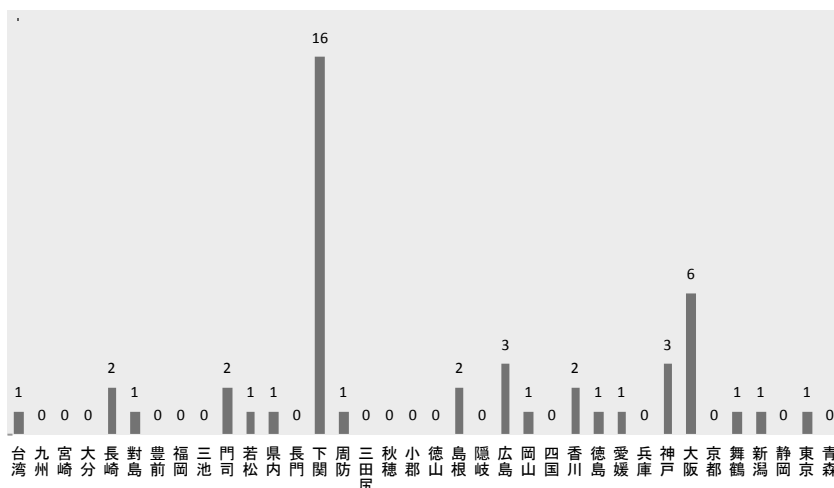


図4-2 厚狭郡移出品取引先一覧(明治41年)

厚狭郡のもうひとつの窯場である宇津井焼(長州焼)は、甕・醤油瓶・鉢などの日常雑器のほか、精品の茶器や花瓶などを製造し、下関・門司方面から山口だけでなく博多や朝鮮半島でも特約店を有していたとされることから県外への取引があったことは確認できる。宇津井焼の工場は木屋川河口の宇津井地区に位置し、輸送方法としては船舶がもっとも適しているが、『大日本帝国港湾統計』において近隣の港からの陶磁器移出記録は見当たらない。これは、宇津井地区は山陽鉄道小月駅にも近接するため、鉄道網を利用した輸送を

行っていた可能性を考えたい。

つづいて、明治 41（1908）年の『大日本帝国港湾統計』で記載される厚狭郡の全港湾の移出入品目に対する取引先の件数から厚狭郡の輸送網について概観する（図 4-1・4-2）。この地域は小野田地域の工場関連の燃料や資材など特殊な移出入品が多いことから、多方面からの直接移出入がみられる。その中で陶磁器も含めた生活物資などの多くは下関港からの移出入が多く、やはり下関港の地廻り輸送圏であることは間違いないであろう。

次に吉敷郡・佐波郡・都濃郡の陶磁器生産について概観する。『山口県第二十五回勸業年報』（明治 41 年調査）における各郡の状況を見ると、吉敷郡・都濃郡では、生産規模は少量ながら継続的に生産を維持する多数の窯場があり、周辺都市部への飲食器や生活雑器等の供給を主な目的として生産していたと考えられる。続いて佐波郡の状況であるが、製造戸数 115 戸、職工 254 名を有し、山口県内最大の窯業地帯といえる。また、製品の特徴は、家具類、その他の製品の製造が大半を占め、これらは佐野焼・末田焼等で製造される。

佐波郡の中でも最大の生産量を誇る窯場が佐野焼である。佐野焼は、素焼き土瓶・火鉢・炬燵・七輪等の小物と雑水壺・便壺・井側・土管等の荒物を中心として製造し、明治後期から大正期にかけては各地で建設される工場向けの住宅用の井戸側や便壺が大量に販売されたと伝えられている。

続いて、明治 41（1908）年の『大日本帝国港湾統計』の中から三郡の状況を概観すると、合計 18 港の記録があるが、そのうち陶磁器の記載としては、吉敷郡の旦浦港から福岡県にむけて陶器の移出記録の 1 件のみである。この旦浦港からは明治 39 年調査においても陶器を豊前地域に移出している。

旦浦港は、吉敷郡大道村に属する港で、佐波郡の主要な窯業地である佐波郡の末田・堀越および佐野などの窯業地に近接する港湾である。時代は少々下るが大正 2（1913）年に北村弥一郎によって山口県内の諸窯調査が実施された際には、佐野焼の販路としては、門司・小倉・広島・四国等とし、さらに「製品の販売は殆ど全部帆船に依る」と記され、その内訳として下記のように記される。

佐野村に属する船	20 艘
大道村旦（浦）	10 艘
富海村	10 艘
他郷他県（石見のものあり）	10 艘

このことから、明治 39 年、明治 41（1908）年の豊前・福岡県への陶器移出は佐野焼の製品である可能性が高いといえる。

さらに、これらの佐野焼を運搬した船は佐野焼の生産組合によって取引されている船であるとされる。佐野焼では大正 2（1913）年 3 月より組合を設立し、あらたな販路を開拓し、近隣の諸港から直接消費地へ移送する他、販路を有する井戸側・便壺の二品は組合において品質を統一して販売するなど、近代的な生産・販売体制へと対応しつつある状況といえる。

つづいて、明治 41（1908）年の『大日本帝国港湾統計』で記載される吉敷郡・佐波郡・都濃郡の全港湾の移出入品目に対する取引先の件数から当地域の輸送網について概観する（図 5-1・5-2）。これらの地域は、『大日本帝国港湾統計』によると、郡内の港湾の中に突出して取引件数の多い主要港

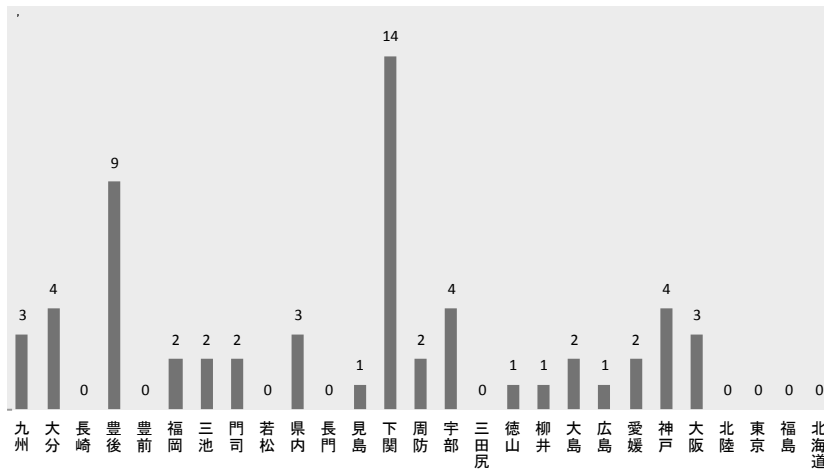


図 5 - 1 吉敷・佐波・都濃郡移入品取引先一覧（明治 41 年）

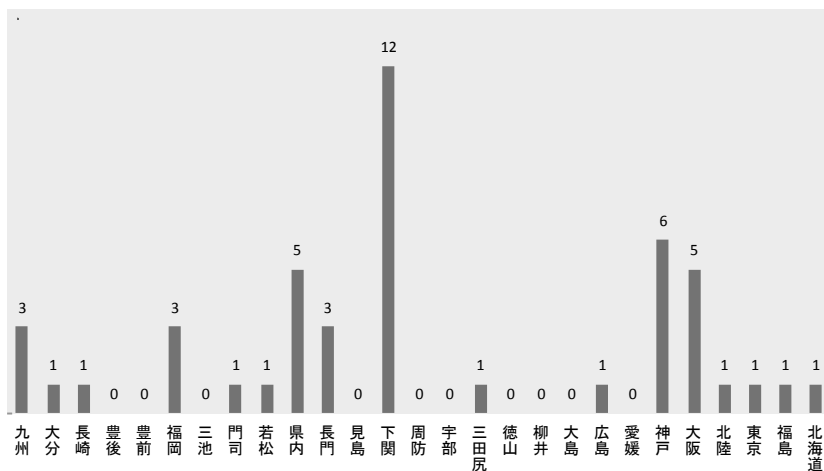


図 5 - 2 吉敷・佐波・都濃郡移出品取引先一覧（明治 41 年）

がなく、そのような状況の中で移出入ともに下関港との取引件数が多い。しかし、厚狭郡ほどの下関港との取引件数なく、神戸・大阪や九州方面など幅広い地域と取引関係にあることが当地域の特徴といえる。

次に、熊毛郡、玖珂郡の両地域であるが、この地域は、熊毛郡の上関港、玖珂郡の柳井港、岩国港といった歴史ある港湾が所在する地域である。これら両地域の陶磁器生産状況を確認すると、『山口県第二十五回勸業年報』（明治 41 年調査）によれば、玖珂郡では陶磁器の生産は確認できな

いが、熊毛郡で 5 戸の製造戸数を確認できる。

熊毛郡の窯業は生産においては小規模ではあるものの明治～昭和期と生産を継続する地域である。おそらくは生産規模が少量であるため周辺地域への供給を目的とした生産であった可能性が考えられるが、鉄道路線や都市、拠点港湾を有する地域であることから、何らかの取引を行っていた可能性は高い。

『大日本帝国港湾統計』においては、玖珂郡の柳井港東側に隣接する岸ノ下港で明治 41～43 年と継続して陶磁器の移出入の記録がある（表 2）。

また、明治 41（1908）年には柳井港へ門司からの移入記録があるが、以後の記録には見られず岸ノ下港に大阪・門司より陶磁器が移入されるようになる。また、岸ノ下港からは周防大島の諸港に対して陶磁器の移出を確認できる。また、両港あわせた移入額に対して周辺諸港への移出額が大幅に少ないことは、商業地である柳井を通じた陸路を利用した内陸部への販路を想定したい。

つづいて、明治 41（1908）年の『大日本帝国港湾統計』で記載される熊毛・玖珂郡の全港湾の移出入品目に対する取引先の件数から当地域の輸送網について概観する（図 6-1・6-2）。これら両郡における移入品の取引先は、大阪・神戸が最も多く、次いで広島県内諸港からの移入品取引が多い。また、移出品においては、主に広島県諸港への移出が多く、下関、大阪がそれに次ぐ。

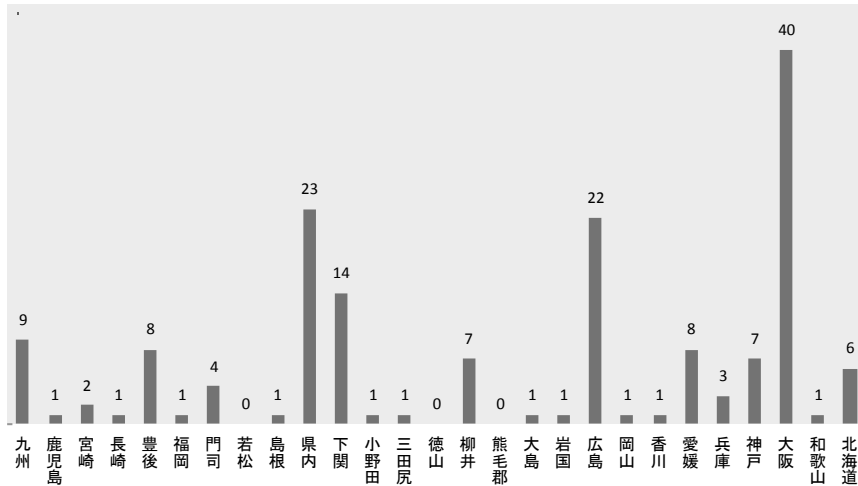


図 6 - 1 熊毛・玖珂郡移入品取引先一覧 (明治 41 年)

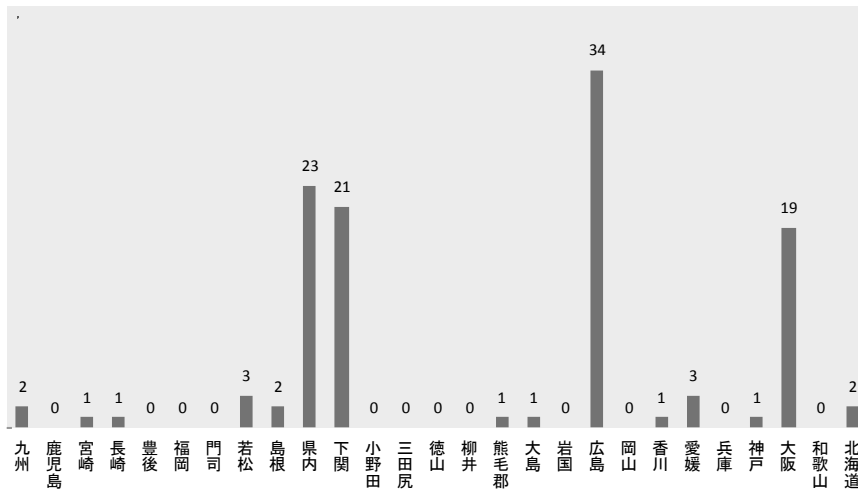


図 6 - 2 熊毛・玖珂郡移出品取引先一覧 (明治 41 年)

これら両郡の港湾の特徴としては、瀬戸内海地域だけでなく鹿児島・宮崎・島根県・和歌山・北海道等遠方との幅広い取引が行われている。さらに下関港の影響力は山口県内ではもっとも弱くなり、広島県諸港や大阪との取引が中心となる。また、瀬戸内海を介して愛媛県との取引が他郡に比べて多いことも特徴であろう。

なお、この両地域の主要港である柳井地域（おそらくは岸ノ下港であろう）と上関港の機能の違いについてであるが、柳井岸ノ下港は大阪や広島からの移

入品目が多く、それらを周辺諸港へと移出する港であるが、上関港は、周辺諸港から移入品を広島や大阪へと移出する港としての機能の違いが想定される。

つぎに周防大島を中心とした大島郡についてであるが、明治 41（1908）年の『大日本帝国港湾統計』によれば、11 港湾の記録が掲載されており、そのうち陶磁器の移出入記録は久賀港で確認できる。久賀港では、愛媛県伊予地域および九州から陶磁器が移入され、周辺諸港へと移出されている。なお、伊予地域からの移入はおそらくは砥部焼と考えることが妥当であろう。

久賀港は大島で最大の取引港であり、『大日本帝国港湾統計』によると取引品は移出入あわせて 55 品目あり、その最大の取引先は広島県諸港である。また、立地的に柳井地域との関係も深く、移出入あわせて 10 品目が取引されている。移出先としては、周辺諸港がもっとも多いことから、大島地域における地廻り輸送の拠点港であったと考えられる。

つづいて、明治 41（1908）年の『大日本帝国港湾統計』で記載される大島郡の全港湾の移入品目に対する取引先の件数から当地域の輸送網について概観する（図 7-1・7-2）。移入品目の取引先としては、広島県諸港からの移入が多く、次いで柳井港となる。また、大阪・神戸・愛媛からの直接移入される取引も多い。移出項目の取引先については広島諸港が最も多く、次いで県内諸港である。

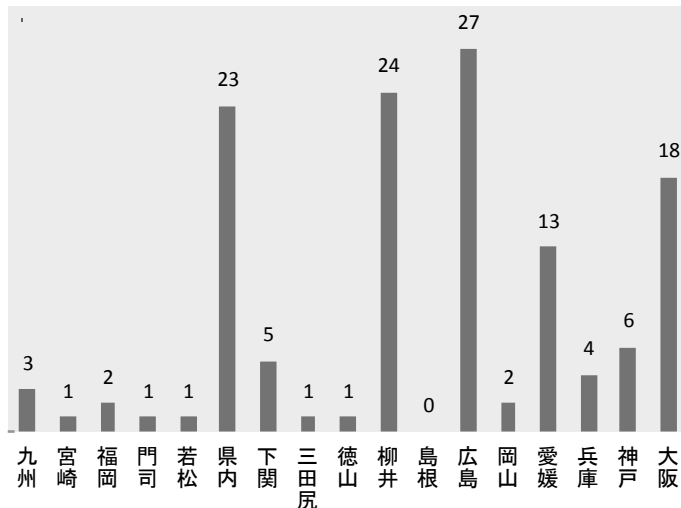


図7-1 大島郡移入品取引先一覧（明治41年）

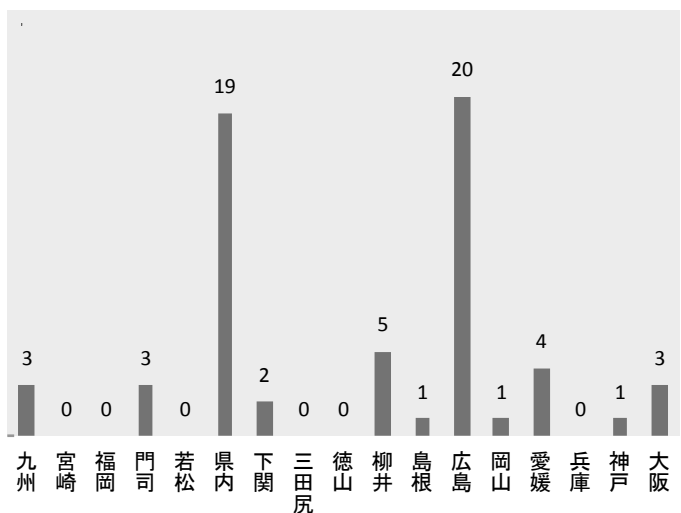


図7-2 大島郡移出品取引先一覧（明治41年）

なお、県内諸港との移出入取引が多い傾向にあるが、これは久賀港から周辺諸港への移出入を含むためである。

5. 下関港の陶磁器移出入状況

最後に、県下最大の貿易港である下関港の状況を概観することとする。下関港は、近世から明治初期にかけて日本海側・北日本への遠隔地流通の中継地点として栄えた港であるが、港の水深が浅いことから汽船の大型化とともに寄港地としての機能に限界が生じたこと、さらには関門海峡を挟み対岸の門司港の港湾整備などが要因となり、中継貿易地としての機能を変化させていった。また、明治28（1895）年から始まる政府主導による朝鮮沿岸出稼ぎ漁業政策の奨励、さらには明治42（1909）年の鉄道院による鮮魚輸送のための冷蔵車両の実用化によって、下関港で水揚げされた鮮魚などの海産物は、鉄道網を利用して下関駅から関西方面だけでなく、鮮度を保ったまま関

東方面までも輸送可能となる。このような漁業圏の拡大と鉄道網、冷蔵技術の発展によって、東シナ海をはじめとした遠洋漁業や沿岸地域からの漁獲物の水揚げ港としての性格が強まることとなる。つまり、本稿で設定した明治後期は、下関港の性格の変化する重要な時期といえる。

続いて下関港の陶磁器移出入状況を確認する。各種統計資料で記載されていることから、山陽鉄道馬関（下関）駅開通前から開通後の状況を明らかにすることが可能である。資料としては、下関港では移入品種において「陶器」と「磁器」を分けて調査が行われていた明治29（1896）～42（1909）年の状況を明らかにしたい（表4）。

まず、陶器についてであるが、下関港へは明治29（1896）～31（1898）年まで伊賀・近江・出雲・淡路・筑前・石見・伊勢から陶器の移入が確認できる。これらのうち、伊賀、近江についてはおそらく伊賀焼や信楽焼で生産される生活雑器と考えられるが、これらの窯業地は内陸部に位置することから、窯業地近郊への鉄道網が整備された明治22（1889）年頃より流通経路を拡大し、鉄道網と海路を利用して下関港へ移入されたと考えられる。また、島根県石見地方で甕類や鉢などの生活雑器を生産する石見焼は継続的に下関港へ移出されているが、石見地域から山口県への鉄道網が完成し

表4 下関港陶磁器移出入一覧

年	品名	移入			移出		
		数量(個)	価格(円)	仕出地	数量(個)	価格(円)	仕向地
明治29年	陶器	17,000	6,500	伊賀、近江、出雲、淡路、筑前、石見、伊勢	16,500	7,300	北海道、北国、九州、陸奥、朝鮮、越中、越後
明治30年	陶器	17,500	6,800	伊賀、近江、出雲、淡路、筑前、石見、伊勢	16,625	6,783	北海道、北国、九州、北越、陸奥、羽前、羽後、筑前、豊前
明治31年	陶器	15,750	6,111	伊賀・近江・出雲・淡路・筑前・石見・伊勢	14,962	5,804	北海道・北国・九州・北越・陸奥両羽
明治35年	陶器	20,150	11,900	大阪・県下・筑前・石見・三河・伊勢	15,000	10,400	北海道・九州・北陸・県下
明治36年	陶器	50,274	25,137	関東、山陰、山陽、四国、九州、県下、京都	45,247	24,886	県下、中国、北海道、北国、九州、京都
明治38年	陶器	6,445	5,801	大阪・県下・筑前・石見・三河・伊勢	4,800	4,752	北海道・九州・県下
明治39年	陶器	4,550	4,550	大阪・県下・筑前・石見・三河・伊勢	3,360	3,696	北海道・九州・県下
明治41年	陶器	15,020	11,503	伊予、石見	12,039	10,129	北海道・九州・県下
明治42年	陶器	7,510	5,633	大阪、筑前、石見、伊勢	6,020	4,515	北海道、九州、北陸

※明治30年は、『赤間開港統計書』より、36年については『下関市勢一斑』、明治41、42年は『大日本帝國海運統計』、その他は『山口県勸業年報』より

年	品名	移入			移出		
		数量(個)	価格(円)	仕出地	数量(個)	価格(円)	仕向地
明治29年	磁器	52,500	63,122	肥前、美濃、尾張、京都、但馬、伊予、県内	53,500	67,121	羽前、羽後、北海道、筑前、豊前
明治30年	磁器	53,500	64,900	肥前、美濃、尾張、京都、但馬、伊予、県内	50,825	64,737	北海道、北国、九州、北越、陸奥、羽前、羽後、筑前、豊前
明治31年	磁器	48,150	58,406	肥前・美濃・尾張・京都・但馬・伊予・県内	45,742	55,485	筑前・豊前
明治35年	磁器	17,900	35,400	肥前・美濃・尾張・伊予・県内	14,500	31,200	北陸・北海道・九州・県下
明治36年	磁器	35,478	88,695	関東、山陰、山陽、四国、九州、県下、京都	31,930	87,808	県下、中国、北海道、北国、九州、京都
明治38年	磁器	17,190	48,132	肥前・美濃・尾張・伊予・県内	13,920	38,280	北陸・北海道・九州・県下
明治39年	磁器	20,630	57,764	肥前・美濃・尾張・伊予・県内	16,700	50,100	北陸・北海道・九州・県下・韓国
明治41年	磁器	25,852	61,537	県下、肥前、伊予、美濃、尾張	12,039	10,127	門司、北国
明治42年	磁器	15,512	11,503	肥前、美濃、尾張、伊予	14,200	29,370	北海道、九州、北陸

※明治30年は、『赤間開港統計書』より、36年については『下関市勢一斑』、明治41、42年は『大日本帝國海運統計』、その他は『山口県勸業年報』より作成

ていない状況であることから石見焼については海路を利用した輸送が行われていたと考えられる。

磁器については、肥前・美濃・尾張・京都・伊予など主要な磁器生産地から移入状況があるものの、徐々に取引数量を減少させる傾向にある。これは移出についても同様で、下関地域からの磁器の移出先は、明治29（1896）年頃には日本海沿岸の各地へ移出されていたものの、明治40年頃には移出先、取引額ともに減少する傾向にある。

このように下関港では、明治30（1897）年代頃までは西日本各地の窯業地から海路を利用して輸送された陶磁器を県内諸港へと移出する地廻り輸送だけでなく、北海道・東北・北陸など日本海沿岸の諸港へと廻漕する中継貿易地としての機能を有していたものの、明治40（1907）年頃という下関港の性格が変化する時期と同じくして、陶磁器輸送についても、日本海側・北日本への中継貿易地としての機能が徐々に失われて行く傾向にあるといえる。

なお、本稿では取り上げていないが、下関港の陶磁器輸送の日本海側・北日本への中継貿易地としての機能については、下関港から朝鮮・中国向けの陶磁器輸出港へと変化した可能性も高く、下関港の陶磁器貿易の中継港の機能については、海外貿易を含めた再考が必要と思われる。

6. まとめ

山口県内の明治後期の各港湾の流通網を検討した結果、山口県内の日本海側では、下関港を中心とする近隣諸港との間で地廻り輸送圏を形成するだけでなく、これら諸港の中でも地域の拠点港に対しては、鉄道が整備される前段階であるにもかかわらず、大阪、神戸といった大規模商業港などから下関港を中継せずに直接輸送による物資の移出入が行われる例が多数あることが確認できた。

これは、陶磁器流通における下関港と日本各地の窯業地との関係にもいえることで、明治30（1897）年頃までは日本各地の主要な陶磁器生産地から航路を利用して下関港に陶磁器が集積され、それらが下関港を中継して日本海沿岸諸港へと廻漕していた。この状況は、明治40（1907）年を前後して徐々に取引件数が少なくなり、航路を利用した下関港から日本海側・北日本への陶磁器の遠隔地流通

の中継地点として下関港が衰退する傾向にある。これは、おそらくは下関港が廻漕していた日本海沿岸の地域で徐々に鉄道網などが整備されたことによる主要生産地から鉄道網を利用した輸送体系への変化、あるいは山口県内諸港に見られるように生産地から遠隔地にあたる地廻り輸送の拠点港に対して航路を利用した直接輸送が行われるようになったことによるものと推測する。

その一方で、明治30（1897）年頃まで有田・砥部・美濃・瀬戸の飲食器を中心とした磁器類や石見地方の陶器類が下関港へと直接移入されており、これらの製品は下関港から北国を中心とした日本海沿岸地域へ廻漕を行うだけでなく、山口県の西部及び日本海側の諸港へと輸送されていたと考えることが妥当である。

そうすると山口県の西部及び日本海側地域における陶磁器生産は、明治20（1887）年代という鉄道開通期以前より下関港を介して移入される日本各地の主要な窯業地の商品と競合する関係にあったことは間違いないであろう。このことは、明治前半期において山口県西部の豊浦郡北部諸窯が廃絶する要因のひとつとなった可能性は高い。

また、このような陶磁器の移出入の概況を認識したうえで、一般的に広く流通する碗・皿類といった食器類だけでなく、製品の特色や個性に商品価値を有する陶磁器という商品群が他地域から集まり当地域の生活様式にどのように取り入れられていたのか、各地の主要生産費の調査を実施するとともに、地域に残された実物の資料群を確認することが当地域の陶磁器を利用した生活文化研究において今後の課題といえる。

1) 参考文献

- 下関市市史編修委員会『下関市史・藩制一市制施行』2009年
長門市史編集委員会編『長門市史 歴史編』長門市 1981年
豊田町史編纂委員会編『豊田町史』豊田町役場 1979年
豊北町史編纂委員会編『豊北町史』豊北町役場 1972年
豊北町史編纂委員会編『豊北町史二』豊北町役場 1994年
萩市史編纂委員会編『萩市史 第二巻』萩市 1989年
萩市史編纂委員会編『萩市史 第三巻』萩市 1987年
小野田市歴史民俗資料館編『小野田の窯業 皿山・その変遷』小野田市教育委員会 1994年
小野田市史編纂委員会編『小野田市史 通史』小野田市 1990年
防府市史編纂委員会編『防府市史 通史Ⅲ 近代・現代』防府市 1998年
山口県編『山口県史 資料編 近代4』山口県 2003年
山口県立山口博物館編『防長産業の歩み』山口県教育委員会 1981年
日本窯業協会編『工学博士北村弥一郎窯業全集第三集』1929年
加藤藤雄「山口県の窯業の沿革と現況について」『大日本窯業協会雑誌』大日本窯業協会雑誌 1935年 第43集 516号
長門鉄道株式会社運輸課編『長門鉄道案内』長門鉄道 1922年
山口県教育委員会文化課山口県埋蔵文化財センター編『山口県埋蔵文化財調査報告第74集 生産遺跡分布調査報告

書窯業』山口県文化財愛護協会 1983年

鉄道省運輸局『鉄道の貨物輸送試験成績1』1930年

2) 統計書等一覧

内務省土木局『日本帝国港湾統計 中編』(明治三十九年、明治四十年)

内務商土木局港湾課『大日本帝国港湾統計』

農務局・工務局『府県陶器沿革陶工伝誌』1886年

農商務省工務局『道庁府県重要工産物一覧』(1898年)

農商務省商務局『各府県重要商品調査報告』(1911年)

商工大臣官房統計課『商工省統計書』

農務省各局編『農務省統計表』

山口県内務部庶務課『山口県統計書』

山口県内務部『山口県勸業年報』

山口県『山口県治一斑』

赤間関市『赤間関市統計書』

下関商業会議所『下関商業会議所報告 明治四十二年度』

下関商業会議所『下関商業会議所年報 明治四十三年』

土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム

研究紀要

第12号

発行年月日 2017年3月
編集・発行 土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム
〒759-6121 山口県下関市豊北町神田上 891-8
TEL 083-788-1841
FAX 083-788-1843
印刷 株式会社アート
〒751-0833 山口県下関市武久町1丁目5-14
TEL 083-253-3451
FAX 083-253-3453
